

---

# あの日あの時あの場所で

R Y O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あの日あの時あの場所で

### 【Zコード】

N4109A

### 【作者名】

RYO

### 【あらすじ】

主人公の『良』の荒れに荒れた中学時代から夢をみつけた高校時代。青春真っ只中の10代を等身大の視点で描いた物語。思春期に起ころるいろいろな葛藤。仲間達とたくさんの経験。仲間の大切さ、青春の輝き。大人になって忘れかけてたあの頃、いろいろあつた夢！希望！もつ一度思い出してみませんか？

## 第1話中一、夏始まり

何もかもが嫌だった。

中二の夏、髪を染めた、タバコも覚えた。ただの興味本位だ。あの頃はそれがカッコイイと思っていたから。

それなのに親はやたらといらない心配をして気を使うし、先公はクズだの落ちこぼれだの言って寄つてたかつて頭から抑え付ける。みんながみんな自分の考えを押しつけてくる。

何が正しいかなんでもわからなかつたあの頃、周りは普通にしろって言うけれど、”普通にするつてなんだ？” ワケもわからない大人達の言葉や行動に俺のなかに溜まるストレスが苛立ちに変わり、その増幅され続ける感情は抑えることなどできることなく手当たり次第にぶつけた。そうしてゐる内に俺の周りから人はだんだんと離れていった。ほっておくのが一番いいと思ったのだろう。俺は俺でそっちのほうが住みやすいと思つていたし…。

しかし、実際はその逆で、そのせいで俺はさらに荒れた。あの頃の俺はほんとに荒んでいた…。

今にして思えばこんな俺が今日まで生きてこれたのは、あいつらがいたからだ。唯一そいつらの前では笑顔があふれる。氣のあう最高の仲間たち。いつもどこでも一緒にいた。そいつらとの最高の10代日々

9月の始め、夏の暑さは和らぐ気配がまつたくない。ジリジリとアスファルトを照らす太陽。溶けるほどに暑い炎天下の中、ダラダラと通り慣れた道を歩く。

そう、新学期の始まりだ。休みの気分はまだ抜けない。

中学一年になつての夏休み、俺はいろいろな心境の変化があった。髪を染めてタバコを吸い始めて。休みの毎日夜中に家を抜け出して仲間と集まって、騒いで明け方帰る。その繰り返し。とくに何をしたとかは覚えていない。タダそれだけで楽しかつたんだ。

毎日がキラキラしてた。何もかもがうまく行く気がしてた。

学校が始まるのはホントにだるい。朝も早い。まだ寝ていたい。休みが名残りおしい。でもこればっかりは仕方がない。

足取り重たく、学校へむかつた

俺が通っている中学は、都会でもなければ、田舎でもない。都内までは電車で1時間も走れば行ける。でもこれと言つて売りもない、ごく普通の町のありきたりな場所に建つてはいる。俺はそんな町でそれなりに不自由なく育つた

しばらくして学校につき、教室に入る。約1ヶ月ぶりの教室。木と埃の混ざったなんとも言えない匂い。見渡せば各席にはもうクラスの奴らが座っている。クラスメイトとはいえ、夏休みの1ヶ月の間、まったく顔を合わせない奴がほとんどだから、なぜかとても懐かしく感じる。

そんな中、懐かしさの欠片もない、よく見慣れた一人の男が話し掛けてきた。

『良ちゃんおはよ。』まだ声変わりをしていないような、細く高いトーンで俺を呼びながら右手を振っている。こいつの名前は『豪』名前とは逆に小さくて顔も女みたいで典型的なひ弱な感じの男だ。なぜか知らないがやたらと俺についてくるのでなんだか憎めない

奴。いつもつるんで遊んでる中の1人だ。

『あーあ、良、お前そのまま来たのかよ！アホだねー。』豪の隣にいる男が、いきなり嫌味つたらしく声を掛けてくる。そういういつもつるみ仲間の1人。名前は『雄太』。小学校からの腐れ縁で、幼なじみというか兄弟みたいなもんだ。

”そのまま”とは俺のこの黄色い頭を指していったのだろう。夏休みにみんなで染めたのだが、こいつらはしつかり新学期前にカラス色に戻してきた。

『お前らこそ何真面目に頭直してきてんだよー情けねー！』俺はとりあえず納得いかず言い返した。

『情けねえとかじゃねーよ！お前はホント馬鹿だね。どうせ教師たちにすぐ目え付けられるぞー！まあとりあえず今日は放課後呼び出しだねー。カツコイイ！』雄太は半分笑みを浮かべた憎たらしい顔をして言つた。さすがに力チンときたが、俺は言い返さなかつた。雄太は頭がかなりキレる。テストでも、勉強なんかしないで俺たちとつるんでるくせにいつも上位だ！俺が口喧嘩で勝てるわけもない。それは分かりきっている

ついでに付け加えるなら、雄太は昔からサッカーをやついて、それが地区の選抜にも選ばれるほどの実力だ。

最近は俺たちと遊んでばかりで、部活もさぼり気味だ。しかし、それでも教師たちからの評価はたかかつた。

おかげでその分俺たちの風当たりは、すごぶる悪かつた。俺はそれが気に食わなかつた。

”俺と雄太で何が違う。

勉強ができるだけで、部活に入つてからつて、俺らと遊んでいる時にやつてることはなに一つ違わない”別にそれで髪を直さなかつたワケではないが、ただそういうた価値でしか評価をしない人たちが気に食わなかつた。だから先公に呼ばれるることは承知の上で、俺は俺を貫くことにしたんだ。

もう一人言い忘れていたが、仲間がいる。

そいつの名前はタクミ。こいつだけ隣のクラスなのだが、もう一言でいうとアホ！アホが服着て歩いているようなもんだ！俺もあまり人のことは言えないが。

雄太いわく、俺とタクミがタッグを組むと手に負えないらしい…。タクミとつるむようになったのは、2年になって最初の時、原因は覚えてないが、喧嘩になり、思いつきりヤリ合つたあと意気投合という、よくありきたりなパターン。

俺たちは大体はいつも、この4人で行動をしていた。

”キーンコーン、カンコーン…”

夏休みの思い出など、くだらないことをワイワイ話しているうちにチャイムが鳴り、担任の教師が入ってきた。

あえて名前は言わないが、嫌な教師の代名詞がよく似合う男だ。特に俺たちのような（世間から見れば、いわゆる不良）をこれみよがしに、嫌っていた。

雄太の期待を裏切ることなく、教師の鋭い視線は、まつさきに俺に突き刺し、同時にゆっくり口を開いた。『おーい、藤枝、お前これ終わつたら職員室にこい！』脂ぎった太い声がやけにカンにさわる。ついでに雄太がこっちを向いて笑っているのが、これまたカンに触つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4109a/>

---

あの日あの時あの場所で

2010年10月22日00時32分発行